許鞍

惣論下

凡例　首下

惣論下

此物語注釋どもの事

此物語のちりぢりに成事ハ源注拾遺玉かゝ抄いとまてるごとく河海抄ぞ大江の抄に始なりける孫までも奥沖のいとまてるやうに暗記の誤などよやあらん其の書ふりとて引出ること尤今の世よりさかしふ見てぬるども多く又引歌の句なども本集とハられぬはらるることゞめくあまてゞ半こうの物語ありしたるうげこの事ありしかとも次ハ花鳥俤情ありゝこれらこそ大こゝハ河海よりしれるるもの多く又誤まる件どもおりゝゝ。ひとすゝふハ後ひがこと。中次ハ哢花細流明星孟津抵に入楚萬水一露湖月抄などなかさ海ぐ多ゝまでゞ本居宣長のいとれるごとく出されざるの抄どもを引出すすゝゝ考を加へられるのこふてさしてゝ尽まる始ことなり。中平ふ細流ハ一ふりありてやゝ多く俤の抄ゝ

いとくまされることどもなりかまさ淑月抄ハ師説も今按も。さればくのおほハ
ふもちまさりて関ゆるものなりるハさればくのおどもをとゝべんてそのよ説
しるに従へる所なるべし。されども今ハ紙に入楚よりぬれ出るもとんゆる
半ありて、入楚よりかゝまさりてるるのハ。まなびふ迷ふてるるのどもあり。此
抄ハ年文をけあげ。考ふるふ抜年ゆて滑やまれ所ふや。今の世ふあてあつふ
抜たゝ数あるぬたゝ。さまでなくいるどもくゆるゞどもれおいた
ようハ。ふ抜ふくりくく弁へらまるゞごとし。さて法海花をもてあて
をかれ抄どもハおかるこやのよるるれるるゞのけうゝるゆふく。
時代もあいゝへふ近るをかるいふといゝむ人どものあるハぶふ
さることゝ。ふ所をいるゝと考ふるたゝ中昔よりるるこの抜徴人ども
よハおぢたあゝ一ッの癖ありて。仏半のゝ人ふも秘説おどいひてさせるふも
なれこゝまでも秘らゝ半なるゝ。ふかるゆおどもゝ。ゞ一人二人よ

のゝ秘傳へゝ。あまゆくくよたするのおどふをゝくなるゝ。あるゝ
しゝへふ古の書どもを見集めて事の法を考ふるなどの学ぶもおろそかなり
しばゞかゝぞと。いかゝふ考へ出るゝを暗記のまゝふ注しつけれる
影ひも今き所よぞあるべき。又昔の公事儀式或ハ衣服調度の故実おどハ
やんことあれはあゝふて泊きゝれることあるべきハ抜ふ誤なるべきゝ
なるとゝどれどふ古き書と相てゝしてんれど。猶いゞゝくおゞゆるゝども
もあり。案ふものの抜徴つくまる。一條院天皇の治時よりハそゝゝの年をか
さゆきて。今式の法制度もやゝくあゝぬさ法ふありあれるふ。兼久建武の
乱まよりハ。大内のけうさあもいゝくなふゆゞくゝることおやく。注者ゝられい
まゝくるせもたゝ乱せあゝ。故あどゞるべきおとよりもけなゞくふ
ちゝれる半あゞ。列よちゝさくをおきゝるべれどゞふもあゝねを既ふ注
釈をおきゝまてるゆてもゞまるなる半どもの知まざりしおどハいちゞゝ。

ぬきバそのうへざまなれ説ども、又ひさむたよハ半のこゞ[illegible]じさまバ今ハ湖月抄ようなるれ注ども、舊注と称へくくたゞ連さぶるのハ先舊注より号めてゆくべたことわりなきバナホ二三をぞ[illegible]つけぬさて契沖わくしの源注拾遺ハ右の舊注どもの半ばゞへる條どもをあちこく古書どもふ考へるゞして、そのうちに半ばゞを論ひるるあふく、いとおむしくめでたふみゝ此人ハよふいとゞさざるほうしくふて、そ[illegible]の家集ゆくまの説とのくかの秘傳などやうの説よハかゝるゞ古き書ふれ然して、そ実を考へ合せられきバ浮ることハひとつもなくして、近せよいとゆる考證学ばゞあの師なりゞされバこの拾遺ふく、必抑何のちくさくれやうもいくく改まりぬきゞられうもあるをバ新注と号けく別てうちきどとこの書ハたうく舊注の誤を正さをのくせんとせられきバ半文のうへふうけて用あるまゞいとすくふ、されバそ説をとれることも又いとをうくゞで。

さるハあゞくるの論ハ引出さりとも半又よのむべき半あふハあづくく孫バ多うしく学ぶ、近きころ板ふをうく学ふ弘まれるをいうあることふうこてうくこのくきる條どもありてくまくのこれる写本、又玉小櫛添注附滴などふ引きてる條どもの脱ることと彼此ありゞさる所どもハ写本まこと附滴などふうてうくるもあれバさるゝて板本とあハねを物くべくくゞで、そ次ハ園部翁の新釈といふ抑うりそ此惣考一冊ハ世家士論と共ふ板ふをうて行きまくるゞ大うくかの七論ふ似るものあることゞ、玉小櫛ふいとれるゞごと、そ考末ふちうさくれ例ども挙らまてる所あるハこゞくびもまゞ不往ひてなふくれれまく加へく文法をとくわるまゞすけちくくうくそのよくハ凡例よいあゞごとく。さて桐壺まくよう次くのちくさくれやうハ舊注をまゞへ勇あて注せられくるふそ舊注と今按とれるゞちゑんなくくていとく紛らちくれを彼此くゞんくく今按のうくをのくに引出ちくこの本ハ実本ばうとをゞくくく。

ものがたりとも二やうあり。俗語よりなるハ又べつの本とみてとかくとがへる所どもあり。おのがなりる二本のうちよハ別記のそへるゝ後ふ改めまてるものとみて。ちうさくもいさゝか考ふもあり。まゝ一本とゝがへるふるがも。猶ふ考へてれうとおぼゆるがもおほ。然までもその別記のそへるゝハ字ざまいとゝろくして。僅ゞ所〻字けこバをんりさなくしてちゞめの稿本とみるゝをもひとり閑のゝ。此書の大むねハかの拙考ふもいたれるがごとく。大ゝハ諷諭のこゝろとみてれさる所〻多くて。いと也ハ論ふがもあれど。おのゝもひもありて。さる條ゞもハ。もとゝ。されどやむことをえぬふるハうつゞ記ゞ。そのうをとゝろりつゝ。次ふ加藤宇万伎の雨夜物語ゐみ河といふものあり。ごゝハ帚木巻の冒頭ふ解ふて。ふゝふ俗語をくりつゝく注ゝゝふ。世説ども。大ゝ圓紙翁ハ伝へらまてるさゐ。ゆて。新釈と同じられど。今ハさゝも引出ゞ。さて世次ふ中居翁の。むふ拙あり。此書ハ拙語といふものゝ

すべてのやうを論ぎれることいとまやうふして。学よりこと鄭あるまとなり。中ゆも作りめ一のあるもひゞもを此拙俗の中ふ伝となくうゆあていとまてるを凡出く。さゝれさる所〻をふあつめて。そのうをふ注ゝるゞハかゝてもゝひ及ぜぬ。うゝがへなるふ拙のあられをもるゆ。拙伝のむひとあることなるようをいとまてるゆども。学よりの注どもふゝえていとれぬ事ふていとめづらふめでゝふたと。上條ふあづゝ引出ていへるゞごとゝ。拙伝ゝ書ゝ。ハ彼書の一二のそふいひてゝもまれバ今ハてれふあづゝひて略きゝゝとゞも多ゝかあゝゞ別ハ凡べたゞさて書ゝの注釈のやうもさたゞゝれ抄どもハてとうりて。めでゝたゝ説どものゝうる中ふてふをハの格（サダリ）。詞のそゝゝたゝ様（ザマ）なゞハ此翁の考へるゆ。ハいとゝゞしきゝゝゆゝりたをゞゞめて多く考へ時〻あらまゝゞのことあまゞバ。語（コヽバ）のうゝゞ。ゞゞたゝゝたゞゞ。てふをハの係（カヽリ）結なゞの孫（スヱ）いとくゝまやうゝてみや

びきのけうひさハ此ふしにて始てあきらかになれることにていとほしきこのこ
ろまでハ大かたこれまでの見やう人情のおもむきをふかく考へておもひしれざり
と見ゆることおほくして其説どもいとわざとやうに強説(シヒゴト)とみゆることハいとおほく稀也
すべてものゝあはれのこゝろハおしなべて何事の説にても人情のおもむくまゝを
あきらかにさとりて其世のさまをも作りぬしの心にいかにもかなひて今の人これをきゝて
所までも深くさとりてくはしくとききたれバ理(コトワリ)ハ理としてげにさなりとうなづか
るゝものなる故此翁の説ハさるところまでよくおもひはかりてげにとおぼゆる事
されど多し然れバ此物語いでこしより以来の注といふ注の中にハこの玉
小櫛にまさる物ハひとつもなく作りぬしの心にかなへるものとみえたれ
ばとおぼゆるもまた其小櫛にもれたるなんどありけるこそハあかぬこゝちには
むすぶやうなれど他(ホカ)の物どもとくらべてよくよく味ひしるべきなり然るを此書するハい
よいよ年老てものせられたるものにて末摘花の巻よりの末ハ注釈いとあらくなりにして

ちかたにこゝをならひよろしくあられざるところあるハいとあらぬくちをしけれ
わざはなんあるされバ若紫の巻までハむねと彼説をとりもちゐしかど
末摘花巻よりしもハおのがちからさくそのこゝろむねと押して彼説を采らること
のおほかれハ采るべき説のなきにはあらざるべし又他の抄どもにはいたくしくおぼゆること
多かるも悉く弁へんはいとわづらはしくて拾遺新釈のさたといへども取(ラ)ざる
ことハかいやりて其あたりをばことわりしぬを小櫛ハいとあしくいへるにぞや見ゆる所をも
大かたは引出てあげつらひたるのども多しさるハ浅きものなるざえをもちて此書の
のこる論文に論ずるやうにていとそこがましくそれなるくもあるしめどかくぞうつ
らんでよくおもへバいと深く考へてこゝにみちびかれてゆくとも大かたのめでたかるま
んひろまつく初学の者はなほどにもみわけがたかることかくべきの類もあるべしと見ゆる
うしふやむことをとらへ弁へ試みるさへ人さらかしていふこともしとどめおきてさ
て尾張人鈴木氏がかける玉の小櫛補遺といふものゝ二巻あり小櫛の中にいはれ

しるしなどぬかをもおしづみづくれ考を補ひかへるものこゝもまた
とるべきものゝ少くもなをうくよりいせうさて世よハ江戸の石川雅望ぬ著
せる源注餘滴といふものゝ所ゝ湖月抄をなとりてそれとよくぶる注どもを
むひと拾遺新釈の二抄より引出てかゝづく今按をくくへ異くれ引の類
例あゞの出る所ゝこゝうあるぬおゞをかゝ書ふあくせて校へ正し句のゝぶる
を引直し又さはゞくの異本を挙て本文をも校へ合せ又語の注などゝは
あるゆる抄ども中より本類を聚めて引るもあるて便よるのかゝ
ぎ。おやうゝこゝまゝぞ些近き世ふいでるる注釈どもふある。此抄ふおのゞ
えもゝぬおもべきまゝどこもゝぬをいゞをんとて右の抄どものゞふ
とかゞやるゝどもをかゝみふぬきのでゝ注ゝつゝその足ざるやゝろよ。
ものゞ釈をものゝつるあり。さてちくゝの外ふ安藤為章の些家七編と
いふものゝ抄ゝ必んるゞゝ此人ゝろ記おゞゝより此抄注をぬこて。あゝゝの家説を

も学。後ふ些式紀日記を得くおのづゝ些式部のんゞゝをさとりしるば。
あゝゝうゝ記るるよゝ。こゝ書の後ふいへう。巻中のおりの記ハ上ふもゝバゝ引出
るゞとゝ記おふて此抄注の大むひを海ゞ。彼日記を些抄注より引合きて式紀の
才徳のいみゞうゝ事を称ゝ又むゝくゝよりの注どもふいとれるひゞことを
論ゞ破ゝて。いとめゞゝ記すの多ゝ。但ゝ玉小櫛ふこの大むゝ孫くゞあるゝ
人の書ども仕まる例をのこゝひて抄注といふものゝ趣をゝハゞ。といまゝこ
ゝとありて。大くゝこの弁へゞとのゝくあるものゝこれど小櫛の注もおゝいひ
よゞやおゞゆるゞどゝくありて。そのゝ上よいへるゞゞ。ゝふかくゝよ舊説を
とふまゝゝる始の抄ゝて。源氏指きまゝ小村久備といふ人
の著をる。こゝみゝ草といふ抄ありゝこゝ。ハ玉小櫛ふ系図を仕くまくゝひ
ゝゝまゝゞいとゝおくてちゝさゞゞといをまゝゝるをありぬとふゝひくゝ些抄注
よんゝるくゝの系図をあくゝあ仕ゝ又小櫛の年立社図よなくゝひて今ゝ

委しき年立の図をも作りて添ふるものなれば、系図と年立とのみは、かの書からにゆづりて今はおふにつくり出でず。彼書をとりそへて見ん合までなし。さて又熊沢氏の源氏外傳といふものあり。此書のさまは小櫛に論ぎしまするごとく、いたづらなる外傳にして、物語によむには、さらに用なきものにこそあれ。うみ京にくやんとなき作らうぐく。おのが立てる経済の儒学を傳へし時、この物語によそへて、ぞうるを解するものと傳へ出ぬ。ぞふさる作者の物と見えてうべくしく出る條もおほかれど、本文にあらぬなるべし。ぬあぐるすなまれば、今もち大かたさもらして哉ぞ。

引哥の事

物語の中にある歌をとるに、一句などを引出て、其の餘韻(ニホヒ)をいみじく出せるぞ、その本歌を昔より引歌といひならへり。この引歌あるに就にめでたくして、事がらありさま情をふしむまでに出る所多く、ふかくぞふぬけいでたる

かどくしさなくしては、かうはえひよしるまじと惑ずるにも餘りあり。さてとりたてゝいふは、古今集をはじめて、後撰拾遺六帖などに見えたる。又この頃めしの時よりあなたの集に出たるなどを、奥入河海などにかいあつめて挙げしまし、其後々の抄にも次々に引そへられたる物に、その引かへたるなどもその本書とくらべて見れば、詞のたがへる所も多く、或は本末入違ひ、又は何の集にも見えぬなどもありて、いとみだりがはしきは、捨し新釈小櫛などにさかくいはれたるのあるに、餘情には特にして、本をとらずして哉らされど、物のとまるも多く、其の中もしぬなどもまじまる新釈などには、注者のみだりにつくりてのせられたるやうにさへいはれたり。然れども今の世にはうせて知られぬ集も、その世にはありてになしらんを引まじるもあるべく、或は今の世の集なる方に写しひがめなどして、却てたがへるなどもあるべければ、いちがちにいふべくもあらず。されどもまさにふは餘りに拙き

分どの〳〵見ゆるべきことなれども、又年の分れ目を、ぶ
と引うへて用ゐられるもいかゞ。作りめ〳〵のはふんもゝひあり〳〵のことなれば、
そもそも合いかゞうかあべき。ぞ所〳〵よ注するごとし。さて又湖月抄などよ、
引歌の所よ、かゝる点をうゝる俗あるか。ぞ点をうゝるか引歌なゝぬ所いと
あやし〳〵。引歌といふ、ぞ分の点をうゝるべき。初ざまバ引歌なる一句ぞうのさま
なしぬところ所なり。ぞ所ハことひぞ分の詞をとりてうゝれるうとゝるも。
あやどうゝるのこなるハ和歌例のごひこざれバ今ハ此引歌の所ばかり。
〻点をうけて分てゝ。ぞ所ハ釈よ点多を注〳〵。

准擬の事

舊注よ准擬といふ事ありて、桐壺帝ハ醍醐、天皇か准ラ后、朱雀院の帝ハ
村上、天皇よ准ラへ、源氏君ハ西三條、右大臣光公、或ハ西宮左大臣高明公か准
ラるゝ。いひ又夕霧の御ぐゝ九院ハ御ぐ、左大臣融公の河原院か准ラへ、帚木

岷江入楚の説
かも桐壺帝と
桓武天皇か朱
雀院と平城天
皇か冷泉院と
淳和天皇か准
ラるゝ。つゝハ
ぐゝ。

の中川ぞ家ぞ、藤原相如ノ朝臣の家よ准ラふるなどいふ類ひのすゝこれ〳〵
ぞ分をいひ出てゆゝ附ぞ。作るゝゆもいとおゆゝれど、あゝ方ちかぞ人のす
とさ〳〵あてゝ准ラへゝるふかあべ。ぞ所ばかりつゝるゝあるくさひひよ彼此えまで
へゝぞ所ゆゝげをかまてるなるまべ。さゝゝゆをいとんよハかゞゝゆあさ
なるふ又ちゝひゝゝとあゝまるゆハゝゝえてなゝれバ。まつひよいゝづゝるゝ。
さまゝバ。ぞ所ふいゝまてるゝゝ。とてもかゝてもまゝべ兄弟ゆまバ。今ハ兼く
かしゝゝ。日本紀伊局考よハ。源氏君を遅桐、天皇か准ラ后。桐壺帝を桓
武天皇か。朱雀院の事を平城、天皇よ。冷泉院の事を仁明、天皇よ准ラへて。
ゝゝとて。作る事ども。ぞ所ゝいとまてることあゝ。これハ桐壺帝を延
喜の帝か准ラへゝるといふよりハまゝゝて。ゆゆまでも。作ゝゝゝあてゝ。ゝんゝ。
抑。ぞ所ぶゝのさゆよあゝ。べさまバゝ桐壺帝ハいづまの。ぞ時ゝゝゝ。
ゝん一人の帝とゝるべゝ。源氏君ハ。ぞのゆよ。ぞ源氏を紛へる人とゝるべゝ。

中川のやども、平府の紀伊守が家、何がし院も、なにがし院とかいてあるべし。さらぬ事にても文字をまじくいはでハえあらぬ所などもあるなり。旧注にいはれたる事をされど、その挙たる数ハもあまりて、ハやむつかしきを将ざるまでの事にことわるがゆゑなりし。さて又桐壺巻に、長恨歌の画を亭子院のかゝせ給ひて、伊勢貫之によませ給へる屏風のゑあるハ、伊勢集にも見えたれバ、実にありし事なるを准へなし。されバ亭子院の事ども、次ハ延喜の帝にませバ、桐壺帝をも延喜の帝に准へたりとも、いふべきなれど、猶しばてこれハかたはら名ある此屏風あるらしに、長恨歌の所にとり出たるのこふにてこそよりて桐壺帝を延喜の帝に准へたる證(アカシ)にはならじぞ、須磨巻にも千枝常則といふ名の見えたるも、平なの上手といひし人なるべきなれど、とり出たる数ぞ、さまでハさるものどもをバ清く名ひすてもぞさしあるへきを、かりに直(マコト)の人のごとくいひなしてよむべきなり。

巻々の名どもの事

此物語の巻々の名どもハ、その巻にみえたる言や詞や、かりそめに取出て名づけたること、諸抄にいはれたるがごとし。これを天台の四門に准(ナゾラ)へ、毛詩の名篇に比(ヨソ)ふるなどいへる、旧注のひがことどもを、新注どもに弁へられたれバ、こゝにはさらにいはず。新釈の帚木巻に、旧注を弁へられたる所に、此物語の名どもハ、いとかろき事よりつけたるを、此物語など一つ二つの名のとりどころなき、それハ古き書どもの名のやうもみれバ、やすらかなるにも、やましくもなるがあるハ、いさゝかおもふべしといはれたるハ、まことにさることなれども、猶よく考へれバ、いさゝかたがへるハ、根ざしの心をしひあやしまるとおぼゆるもこまかなれバ、そこハ此物語の巻々の名ちぢめていへるバかりにハあらじ。

人々の名の事

此物語ハめでたくておかしうるわしかすべて人々の名をいとたのしくたゞ
その御後れ何つきまくその人丸半と呼あるやうにかまてるハまこと
ふいみじくなまといつべしされバ朱雀院のみうど冷泉院のこかどあど
まうけもうでおうなさせるひ後ふそれおもしまに文丸名をもてやし
うるふて実ふ芳おもしまく朱雀院天皇冷泉院天皇の御半ふいあう
む半ぐ惟光良清時方あどいふ二三人ふのこ名ふあまでどてまもろ家
司めたる人よりげある名をもざと作りくいへるなまバこれも物かりの
名なり又上ふもいへるふ技芸別などの類ひハ実よまく人と呼あるを半丸
さはよりてこうゆるのこなまバ物語のすぢにいさうもあづうぬ
半なりされどもあすこみえる人々丸半なれバさえて名ふくてハ
ひうちぐこれふもあるあふかりふとあへ名どもハうぐあうてまもろ
作者のたけこれるもいとこと多うぐ半のさはよりてハ宇陪の君を

帝木とも二やうふいへるごとくさこてまうにいひうちうるふもあ
らぐこそこれさはふりてそれ半とゆあうあまでふつけるのこと
北村久備がすゝまき草の凡例ふ云帝をそこあうせ人々の名を称へ
いうるなり先桐壺帝とハ桐壺ふあうゝある帝なれバ後ふ物語
をよむ人の其帝とうろ料にかうふ名附るのこ物語の詞ふ桐壺
帝といあるふハなてぐ人々の名も芸ふ同じ大臣も納言も幾人ともあく
あまバ位の大臣位大納言とかうふ名附ぐ幾人をうちうるあうかく
人々をいひうつふ物語の作りぬしれ始よりおくせる名と物語を
よむ後の人丸云ゆうこうる名とふうつ作りぬの始よりおくきハ
光源氏匂兵部つ宮薫大将ぢ上夕部上あどよむ人丸名附ハ秋好
中宮槿斎院などいふ類あり秋好中宮を物語の詞ふハ秋のはかこと
きて秋好とハなてぐ槿の斎院も朝顔の姫君とみゆそれハ朝顔の宮を

源氏君とよこうしのひゝまゝにバ。その朝顔の宮よみ給ひ〜ぬ。君といふ
名ある紙。後ゝ斎院ゝ奉り給ふ。おぼしよむ人の名づけて。槿斎院と
申し。なり。此外ふかき所ゝ。人〜。名を後より称へいふも。亦。
三つあり。宮と詞とふよりて。はぎ〜ハ。秋月。夜間。雲井。居などあり。
宮の詞を。其の名とも。宮人の名とも。していふ。ハ。蓬。兵部卿宮。葛。君。
どなり。其。名。なりていふ。ハ。桐壺帝。竹川。左大臣。紅梅。左大臣。葵上
などなり。彼ハ。後へ。記べし。といへり。なるべし。すみ。其の系図ハ。
人〜の下に。其名。出。を。注〜。ゝ。ハ。妻〜。ハ。ゝ。紙。人。ゝ。初。べし。
この作りぬ。のつけ。るとよむ人のつけ。るとの。名。ハ。先。よく。心。ゝ。
ざ。ハ。みな。ゝ。ゆ。ゝ。うちに。まど。ふ。ハ。も。出。めれ。ば。ゝ。ゝ。
へ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。又。此。日。ゝ。ゝ。れ。ハ。ふ。も。人。ゝ。の。ゝ。ゝ。ハ。の。ハ。
某甲ガシノ。某乙クレガシノ詞。など。記。ゝ。紙。ゝ。人。の。名。ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝ標をつけ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ハ。帝。本。巻。ハ。所。中。ね。の。な。で。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
女の半を。注。ゝ。ゝ。所。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ふ。て。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ハ。ま。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ハ。ま。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

所どもハ如何ぞや。

年立の事

此物語の紀年(トシダテ)を考へるに、玉小柳まきすみまき草ふ図をつくりて、とくとく
もるるまもるれバ、そまつふゆづゝひて、今ハ物をだに、これハ誰ぞ、と問はるべ
きことなくさて、年立ハ源氏君の齢(トシ)をもて、たゞけゆくものなる中ふ、
物語のあ紀年(トシダテ)をもゝあるを、仙者(ソウリヤウ)のゝまゝひあり。一年とて、こゝ
ろ、ハ先ッ桐壺帝と、帝木巻との間ふ物語のあ紀年、桐壺巻ハ源氏君の
年侍ふて、年始をかゝゝ出ゝるまでなるまバ、ゝゝるふなりもふ物ごのゝを、
物間ふ省(ハブ)きゝゝ出て、さて、海ゆ。次ハ花宴巻と葵巻との間ふ一年
ゝゝごの物語なり。こゝハ桐壺帝おりゐ給せるひ、朱雀院の帝侍位
よつゝ給せるふ、ゝごの年ある所ふ、ゝごと、ゝゝぢんをゝて、ゝぶれる
ゝ式を侍ゝゝゐゆづりの年を妻ゝゝゝぢ、海ゝのゝごもありて、四

すぢの重なるべきまバ、省きて、ゝはよくもゝゝれ移ど、省きて、ゝ和ハ
かゝゝで侍世のかゝる所ゝなり。その次ハみをつゝの巻と、繪合巻との
間ふ、まゝ一年ごゝごの年あり。こゝハ朱雀院の帝おりゐ給せるひ、冷
泉院のみゝど侍位よつゝ給せるひ、ゝごの年あり。まゝ次ハ若菜の下巻
よゝゝゝふくて年月もゝき移りて、ゝちゝゝゝゝど侍位よつゝ給ひて十八年
ふなゝゝきゆひぬとあるこゝ月もかゝゝありてとゝの後よ源氏君四十二よ
り四十四まで、四年の物語をこゝめ省きて、四十六の年、冷泉院の帝侍位
ゆづりのゝをかゝきてゝう。こゝまゝも侍代のかゝゝめあり。次ハ宇治巻く
こゝハ源氏君の後のふゝきバ、さゝゝよ海ゆ。匂宮巻ハ若君と匂宮と
の後をゝ紀。竹川と紅梅ゝハ、髭黒大臣との中ふ忘れゝをゝれ
ゝるあきバ、この三巻もさゝてゝて年立ハあづゝゝび、橋姫巻ゝゝう宮(源氏)
出ゝまで、ハ若君の齢(トシ)をおひて一つづゝふるゝれゝゝう。さて源氏君の紀年(トシダテ)

を浄代のうちめぐらふかくくちぎめをさてこれるハいろある云ふ
福ど大ろくハ浄代くれ勢ひふよりて源氏君のうへに盛衰のひか
をうけらまてるものよ仏ちまづ花宮あきまでハ程いと
長くもちろるねどふてかうぐしたきものびあり花などちのふるをうた
てとうくはちりあるさ海をのこあ〳〵ハ〳〵さて蓼宮よりハ浄代うちもて
弘徽殿ぐうれ浄勢ひつよくありくやう〳〵ふちてうたるの宮くあり
ちさちつ〳〵ひよハ須磨のうへ〳〵ひうるてちぐ〳〵く裏へさせるみ
やうをあるちるふやさてからうどて宮とけく みやこへかうまふす
をちるうるみをうつの宮ちさでを一つうたとて宮後を一年かまてる
ちのあるべ〳〵此間よ蓼生宮ろ屋の二宮あれどかれハ未摘ふ君と宮ハ君
との海をとぐめるいをあるる弁の宮ちるまでバさうて年ちまあづるう
ふハ〳〵ふさて絵合宮とう冷泉院の帝れ浄宮ちりて源氏君の浄

いきふひやう〳〵ふのぼりゆたよりびけんのまるりてつひよ春ふ未ふ
いうりて太上天皇よ准へるりよれる事かあ〳〵せるひ六條院へ行幸
のりのあるうれで此君のさうれられきハみを書つくをるふるべきさて若菜
宮ふいうりて浄住ゆづりうけりて〳〵きりより朱雀院の浄ふれ法皇をあり
うるよ女三宮の浄生おこりハ六條院のうへよりぬるれ出家つる
ちづめてきりの三宮ハ柏木君のりの女三宮のけりりタ方君のるべど
をいまてくあまど行りの抜れまぐれ六條院のけりをつくりまみ海氏
うけるまづハよろ〳〵ぬ方氏りさて浄宮よりて出うせるふ宮
生涯（ヨカギリ）のうあげたりてまぐろ〳〵の宮ハ宮四弟さのるれくをうれうう
さて宮ほりてかうまりるをこれバみふ此君の盛衰哀楽のうへふよりて
浄代のうりをうて宮ろぐめうるあよ年次（トシ）を首れて宮ちるう〳〵れ
抜とれ中まぐくうまるん此抜落の一紙れ大綱をうひうまへて殿（タテ）ふ年月の

徒へ事を立てられる法なるべくみゆるもて行おこなはるるもののひがごとくやあらんされど大うさハあるべきまでくぞおぼゆる。

系図の事

此物語よりて見てとる人々の系譜ハ多くもなく用あることなれバ一ぢうの心ハおくべし。されどもすべてそれ委しくしるしよめづらしく今ハ省きつ。こゝしかの事ふ皇胤大臣族卿大夫族系図あるべき人どもの人四つをもて類をなしてあれどもとりくるハあるひとも物語よりむ方まていそぐこれハ行主客正副あるべき法をもてなるべし。もろもろ世ぞれバうまく事どもをもてゆきうるもちゆくをきハやうにかなることとそれハまづ一級の主と立てるハ光源氏君なることを論ず。これハ對へるハめづらしく若き為ものあるをそハかりうへ事なるをもて。そのほかりふ所女姓のぼりをやうなるべきまバ源氏君とぼり上とハ此物語の主（メ）とある人なりさて源氏君を相副（とも）てハ致仕太政大臣（ちしのだいじょうだいじん）ぞ。

又此ほうびくよ對へるも二條大政大臣弘徽殿皇后の一族なり。こゝもまたまづ御をとり源氏君の味方とハ此中よりぬきなりて彼此相対へるゞ物語のおもしろきなるまバ客の法なり。事も朱雀院と冷泉院とを世外戚のひくらふよりて事をなりたちるこれなん此物語の大略（オホカタ）趣の立ざまなりさて世沢ハ六條御息所の味方ハ一族。さてハ明石入道の族などなるまどおれさして重くしく事をなるもてぐよハあるべきそれ行人ハ行このもひとある事れをすけふ及出るあれバ文よいふべきもあるべきまでもあるのくそのようきなる事よ法あることなるまバ多くあるべきぞ。そのほうふ詳ぞるをもるべし。さてまた宮法のほうふいうりてもて惹大將を主とをして句文をあひ副（ふ）ふ。六條院より致仕大臣を相副るゞごとくこゝまハ六條院の味方と明石中宮のほうとをお對へて立てるものぞて大うさ同じ行ぞふ並べるあるものづハ

葉をおもとしるさざるべさて八方の雅君をもちをその客として
かのそこにかくれるなすわなほこまにはとどさぬぐの法どもおまでど
そまもそ所こふ許どこまばこそよハこどその大むをいあくこされば
系図をゐんよハかるるをよく心ひ弁へくゐるべたこれハ拙伝を後
べたこあれ系図あまばそ系ふつたての用ひるとハかやうの数どもを
ゐん為ふまでだ出かくねどつうーねくなり。

此拙伝小稿くの法別ある事

この拙伝れめどこたをすを今天ふいひさやさんハとさこびさるの
なまでど。あーくゐんるふまるぶひくまもくいみどさのいひちまぬハ。
半で一わこうふかれる拙よハあーで。やるを記こそむるもであう。
くさぐの法別をゐひ構へくかまるめのと杉ーーそまばくさてその
法則といふハ我国のふみよハいまぐ正ーくゐんてる拙もなるれば何まれ

ぬくの法ぞといそんやうもなるまでどゐこの書どもふ文章の法則
をいるとゐるふ大るこそまこと実あるこもなたさすあるあまばまづを
その法どまよくれる拙とやいそんさハいへりここの文法といふす
もこれのうハいと後世よう盛ふいひ出ーまりまばそれよよまこといそ
むをば誰もくうけあへまどたここよハあまどそのめるここの文法も苔
めてかたるくのみづういひ出るるふあーびぱるその文のいみどたを
ゐんくこそまふなるうんとする後くのかくふ名づけて評ーこるふ起まる拙
ようてもべてハさかりこそあれ法なるされどその苔れ文どもハみづうこもる思
ひるまへてかざうーあもうまま後ようる名をつけくほーして名まばさる法則
どものあるようてこそいみどくゐんやあれば法いることいそんもうたこる
るふあーびさまばぱ拙伝の作りぬくもはる法どもをあこそんこて。
かまるるふあーぐるべこまどいみどたこんあるてゆここの書ども

をうるを極くかんがへてるるよりあまことバおのづから歌法のうつるまでに成ぬと
あしびさびなるようさびなる司馬遷が史記の法あるあどいつてもみな
ぐるより所あれ云ともいふべうぬるやされバとて彼と此とハ語のさ法も
事のさもいさくらうるるあまでなあるおどちよ彼ふなるひらめるおどは
いふべうびかくいひてもなひひるぶるある皇國の学者どもハ例の漢ふ仏ろう
といふをいくきひくおのまを邪人とするもあるめどそハあく一旦ろう
の論といふべしそもく皇國言あどるの文といふものハ祝詞宣命をあ記
てあ外ハ古の世よあるることなく事を記るよハずして漢文章をとう
くかうるる誰もよく知るがごとく極ふこの物語といふ物如事て
よりハ皇国云あどれ文章もかづくおこうてあふるうさハいまでなく
物語ようおつるこの物をるぶふものおいふがごとく詞をつゝ移るのみ
ゆくいまぐぶゝく文章といふべ成などれものとあるぬを物語ゆいできく

なん物をそかくめでるくいみどれ文章ハ世よあるハまてるるさるハまづ
文章といふことハいまゆるあやことばをて作ゆくるを文ふるどう
く漢む人ふめでるくゆるろくゆるむるとぐなるまでふ物ちいふぐ
でるく出つる成いつよハあるぶで文ハあや又うざるなどよむを章ハあきく
ろふあやいるるこの字なるまでなどれをもてとるで云よあるぶる成をバ知べし
我皇國ようをとれようもろことどぐるれを名をつけていふるハいるぶるれど
かの祝詞あどの語をうざうろのへて勢ひめでるくかまてるをこれバ程
るぐ云よ物いふでるくつるぬべ成ものあるるるしさまバ何事を
かどるぬどよることおのみるをつぶるくと書つけるるをふて八何の
をるる成ものあるもあるて文章となるんやるハ第一るで文章といふものを
ものとよう漢の名を借るるなるまでなるるの云ハ皇國のいふるも同どう
思るるこれるをもておるるの成ハまバ物語の文章もかの史記ぶふ

ものさびしくなりゆくといふことなどてひごとあるべきなれどそれ後うづもれる人のまよいそぼりつゝかれなきんと却もハバ杜のづゝ其法のうせるまゝにかの
まゝあるべきなれども杜彼と此とハ世の中のたゝねぶ海もかのいひざ海もいさ
くかたれる事ゝあるまゝばかりひされぐうつゝかんとなるもこゝろて
似つゝるハあるまゝにかあるまゝぞ彼ふなゝうといふんハまゝいといとゝにか
ゐごとゝ世ごゝの空園云なゝれ文章といへべかあて此物語で出出
る始あるといふんよハさもあるべとハ誰ういふんよりやそのかまハとまれ
かくまれ今此物語の文章を評してそのめでゝたよりゝ成あるもの出て
文なゝふ学れきつたともせんとするふハおのづゝ法の名をゝてゝそのの
めでゝたる事をいそぎまバ何をよすぐるまてゝ事をさわゝんそれまゝたゝ
そ法の名をゝもべちふ為く仰んもいとゝハやすたる事まハあまでゝかれ
漢文章の法則といふこと既ふこゝろもゝ傳ちうゝれバ云をかへていひゝうとも

違ふ彼よなゝくるあるかゝべとハいふんさまバいゝづゝあるゝぞふめゝづゝ
ひゝくなゝるゝよ紛らゝくせんよりハとゝかのあるゝれ後世の文法は
よいへる則よあゝひかつその名目あゝをもかゝそば偽て評ぜるゝんん人
さるゝさゝていゝゝな咎めそそのうへこゝまゝたものまゝぞもゝめてゝひつたる
事ゝかもゝいゝべ安藤為章ゞ世ゝ家七論よゝやゝく中偽をゝんいゝでゝいへらく
上畧 全篇ハ富貴温潤の氣象ゝして官家の文章あるまゝでも中ゝ山林出
世あり市井田家ゝいゝ炎困哀傷あり閨情風景ハまゝゝよんて情を
うつゝ景成かゝどる事まのゝゝうゝゝ人よむゝひゝ所よ遊ぶゞゝし
全体ハ傳ゝて文物のゝゝ序の伴ゝいゝ跋あゝ記ゝいゝ論あゝ書あゝ
て諸体ゝあゝまゝ彼ゝたゝ本れ景ハ拙ふ奇物あるゝものなゝ為章
學ゝ其章段をあゝゝん作ゝゝる射序して云論破あゝ論兼あゝ論腹
あゝ論尾ゝいゝ麗より細よゝいゝ俗より雅ふおもゝむゝ繁より簡よ帰波源

頓挫・照應・伏案などいふめりつゝ此文法初のづゝ備はれ氣象ハ悠揚とゝて寛裕ふ文勢ハ圓活とゝて婉曲なり。是ハ定のことなれ一般よりとりて学さをつくべし。史記莊韓柳歐蘇よりひとゝりるべし。女の爭ひてためづゝうにあやゝく式部ハ源よ古今獨歩の才といふべし。いまゝへよりも學問といひあゝもとゝまでも法少納言ハ才氣狹少まゝてさうゝぐちる法あゝりよふくまげもわれのなり。同日ふも論ぜべりゝ。（已上序の畧云々。）といへり。又思設箋の新釈、熟考ふもこれふあゝひく文法を称んとおもへれんとゝて釈を学ゝまゝとゝ和よ云ゞ文義よ未ふあゝん事のゝを前よ学るこれを生張本とも伏案ともいへり。此二事ハ一の違ハあまで大ゝ同ゝまバ互ふもるきり。又お文後文相對へて知るとを頓挫といふ。又文よあるく相對して互よ應答をる法の外よ作者ハ生ゝを評せる類をば記者の語といふ。（俗ふ茶ふ地と云ふものあり。又ゝ應對ハ応ゞ問ふも知と分ゞる所よハ或ハ源氏或ハ上など注せり。又文の句絶よハ僅ふ点し。讀よハ中ふ点せり。（後ゝハ語の小段ゝ。）小段をバ『如此ゝ』大段をバ『大段ゝ』の如記きり。（大段ゝハ全事の終りゝ。）これゝハ日ゞふよ例あれ半もあまでゝんゝ日ゝよりゝむ料のゝなりゝその外右ハ教條のかゝも注法あれども本文を注るふかゝて知るべゝまバ大ゝ注学るゝみ。始ゝく後世の注ふふ矣あるゝ多ゝ。よくゝんゝと注ゝくんゝるべし。先入の為を主として不ゝよゝ知ゝくもゝべられども。始ゝくゝゝゝ注わすゝて古今よつたゝり。誤まるハ粗設むべし。とゝて生ゝるなどふよりゝ。又ふ小稿ふもゝ。ゝまやゝ形ゝ示成ゝ。ふく身ふて作りぬゝのゝを用ゝるゝ成ゝまやゝにあぢゝてふべたよ。ゝだゝくいゝれゝるとふとゝてゝ法ゝくゝふゝくゝゝどゝゝんゝふゝゝもゝれふある事どゝのゝあゝく。ゝ法則の厳うゝあゝたゝ絶ゝくゝゝゝうゝなゝまバ圓祐箋の立ゝあゝゝれゝる法よ今ふ一事ゝゝゝくゝゝてゝの評釈をバめゝゝつゝまゝうゝてゝの法

則のやうハいふといもんよまづ一部よりて一部の法則あり一巻ごと
ふ一巻の法則あり一段ごとふ一段の法則あり一章ごとふ法則あり一句ごと
ふ法則ありていさゝかある事ハ末までおやゝ紀まできゝひろる法則あ
りてその一部よりろる法則とりハ時世年月の移るを経とゝ人事の
きゝろる緯とゝて物の趣を作るふ時世年月の移りゆく
経のうゝまてハ上像ふもうつゝいへるごとく まづ桐壺帝ハ大清代ゟ次
ゟ朱雀院の帝ハ清代ゟ次ふ冷泉院の帝ハ清代ゟ次今上とゝるゝ
帝の清代と定めおきて ゟ中間ふ必物語のあれ空ゝ年をおれる
ゝ法則なり 又源氏君の齢をおひく ゟまゝのへるようわかよて四十
年修の事を五十四帖ふ出つゝねて 始の清代ゝふおろる人ゟ清代ゟ四の
おのゝ紀よりて 此君のうへふ盛衰のいるゝ物をうれるられるゝれ法
則なり かゝてゝ ふ随ひくゝ物ゝ人のうへをも年をおひて大ゝ

相うるふべく齢のわゝ後おのゝ世ゝる 是亦法則あり 空清のゝゝふまゝ
ゝ君の齢をもて年をおひく匂ゝを並べ考ゝる これゝゝ法則なり
かゝ定めおゝて ゝゝて人世のゝれうるゝいでくる事どもを緯ふあやどり
て清りゆゝふ清ひくゝ物ゝれ法則あり ゝハ上像ふもいへるごとく 先ッ光ル
源氏君とゝふをゝて一部の主とゝ 始ゝまゝて對へくかゞやく日の宮 夜殿中宮を元
出ゝる ゝまゝ光と赫と成對へゝる正對の法なり 紀までも後宮ふのゝハ
かゝろへるゝ物ふ 所謂ゝ女御の世ゝ上をゝり出ゝる ゝまゝ後の紀ゝ
うりふ世ゝといへるゝ ふいゝで後宮ふ紀ゝ空ゝ物ゝのごとゝ紀ゝのゝまゝバ始後源
氏君ゝ相偶ひゝる ハすべてこの世ゝ上ゝ ゝまゝ奇對といへゝ かゝなゝゝるゝは
ゝゝふ光と赫とおもゝへゝゝんよりハ今ゝまハゝうくんて かけても及ぬ
結構なりといへゝ さてその光ゝるゝまゝ紀ゝ世ゝ紀を倍ゝふ華ゝ大ゝると匂
兵部卿宮と成なゝゝ考ゝるゝまゝ光のゝゝごりふ匂と成ゝり出ゝる

こゝまでゝ正副の對法にて是源氏君の御ものがたりをうつしとる照應なり。
又源氏君と相副て殺伐大臣をあらそひて出来ども助けあやぶうする。
これも正副の對法なり。まゝ二條大臣弘徽殿皇后御事をいのりて。
源氏君の出族とは中のよろしぬさゝ海よりなりて。拾遺の種子とゝる。
是いとゝ主客反對法なりさて又紫上ハ何事もめでたくきこゆ
て御後の中れ女の主(ネ)とある人なり。平家(ウラ)反よ未指花君とのふかちらろく心
もおくまてゝる人を妻と紅(クレナイ)とむへくゝるこゝまても反對の法さて又人ゝ
のうへを祝ひ出るとも。ゝ人ゝふようて一やゝなゝびさゝ海ぐゝさをうへて
出出られる中よ六條出息所のゝをうまゝゝるハいらゝめづらなり。
夕顔君ふ六條ゝるものゝ君のびゝうきの法といひ出ゝそふかよひゝる。
さゝ海又変化のこゝまてよよへてあゝゝれるさゝ海のゝとも書ゝるゝいゝ
御ともゝゝ人をだあゝゝさびゝるゝふ末ある蓼蓼よいゝゝてゝめてゝ坊

坊出息所あるゝ紫いとまてゝるゝどハいとおひの外に出つゝまゝく
いとゝめでゝこゝまゝいとゝる伏線の法に奇(イミ)ゝ記ものゝ又相思の作君にて。
帚木ゝゝ夢浮の方にて女房どもれ源氏君のゝを伴ぞる法ゝうちに。
ゝふゝゝせ打ゝて。ゝて次ゝふ頭ゝ。ゝかゝまてゝるゝこれも同ゝ法ゝるふ一人も
伊勢むすめれ秋ゝふゝひゝく伊勢へゝりゝひ一人ハみづゝゝ賢成の秋院ゝ立
ゝてゝるゝど伊勢と賢成とお對へゝるゝて件の伏線を引詠ゝゝる出ぞ反
とゝれゝゝゝて又蓼ゝて賢成の車あゝゝそひれるふようて伊やに
どゝゝのいまゝゝゝ海のゝをいひゝてゝまゝようて蓼上ハみまゝゝゝひゝゝと
ゝゝ源氏君の出見所をゝとみゝゝを恨ゝて。つひよ伊勢へゝりゝゝるゝども。
伊勢と賢成と蓼と榊と對へゝるゝふゝゝて御のまぎれの一ゝゝて。
いとゝくゝかゝこゝ出ゝのゝあるに。ゝまゝをゝゝもかゝまゝゝるハ彼ゝめゝれんゝひ
ゝゝゝびよんゝゝる。上條ふいゝゝゝ。彼ゝふゝゝるふようて源氏君ハ太上

天皇ふ准へられひてこよるの紀葉くをきらめまふ海よかまてるを報應
をかんとて女三宮のあれまぎまをとり出てること照對の法ふるゆ
おのづから報應を示しるものくさ多ふ報應の例ぶ冷泉院ふちのめ已
なり。毎のおのとぶ惡者よあらはれもしるも。昔よ同じき類ふハらざと
その照對ふてとをはらはるふて。いとくんふれものくさて柏木君
ハこの事れあるひつありて法ひようせるひ。さまくに後世ふハ人を方君む
くべきるひ。後世方民の後ハ報ふ天民の方ふ宮まるふども。ぱこの報
應のなぐりを示せるなるべし。又夕霧君れうまくでよひるふ浮舟君の
よるべあれをむくるも。照對の法ふてなふがの院と宮法宮と称むく源
氏君と頭中將と二りくまるふ惡者と匂宮と二りくを對へ。又條の宮れ
八月十五夜と。三條の宮れ九月十三夜と成對へて。昔よ清車ふのをて出
るりさ例ふかくまてるも正しく照對をもくせるくさて一人ハへんぐるの

くをふとり教さまと。一人ハこてまふふをれるふども。すべて同じ
年づらひる中ふ生てるくあれ女のよるまのど紀類をふかさせるり。
さて夕霧のなぐりをむぐくふうつても。狂浮舟と對へる法ありく。
紫式と昔信と東西よ對へ。大夫監と右衛門と對へるむくあびるを
むくへ長谷寺と小野の尼とむくうりとんるるりけり。さて又須磨の
うつろひハ源氏君のたぐれ裏へをかんみるをさやく光君ふそふ
塀をあくてて小山よて良清ふ明石上のをかくせるれその伏業
ふてさくく須磨明石の生をかくぐさ結構の法くこも成れても。かの石山
寺ふて須磨明石の生をかくぐさ結構の法くこも成れても。かの石山
又花宴ふハ桐壺帝の御代ふ光君ふ光君さりのさらみ
をあくくるふ樣よ匂ふ朧月ふて。内侍よりくこのあれまぎれをあく
くりをてさてさくりのつりくくつひよ須磨よさすくくまくふ明石

入さむくとうて。いつたかづたをりそこうたひよ拾へうりのふるを秋
の月ふよせてあれうふ第三年の八月なる秋。初て条関白のふよりをうれ
るハ春の花よいでたてめうる梅ハ秋の月ふとけそてうふて盛衰
の因縁を月花ふよてへてゆそせうる。これいとゆる首尾相應する法し。
なく世れかも。源内侍の年老てもさぐ伺ひたよ。近衛君のもとどふとし
あるたをむく。情士ハ女のさえづりうふ。大学の儒者のかうれ
あるを思うるこどハいさうの稚きをれうへまでも。その法なりといふ
半なり。さまでけるこまうなるのどもたいづまてもやまうこの評
釈よいへまでこうるハ只その大あうこのことをいふなりうさて半ハ中ふ
もいみどたハ。を隠者をきてあづうすべて彼を暴れうる。拾るのこハ
いとゝめでゝくいとゝめづゝゝてやまとあうこう。古今ふとうう
てかうる手づうひのいうどたを書ハ他ふ又あうこと物。こうを省筆法のいみじ

きのふてかへをぐくもめでゝ。拾るをさたぐくの泊どもふよりもあた
仏説あど法引いでさ海ぐ用あたを半をバいうまうれどこのや原の
さるべたよりを解きてうる拾のあたもいとくちをゝくあるねるあり。
まゝてうのたうあたをつうりいでゝそのうなうなどいひ一人を。
いとゆる大海の一滴ふ彼りぬ一のををうらぬものふていもく
あどたあくうゝいゝ。拾ハ拾ハ根を重ゝ夏衣のうせまへる
を帝のいゝ欲たまへるより書起されうふ楊貴妃のこあ一をひき
いで。半づゆゝまどろゝもがれてふてもうたあうる紙そこをを
屋ゝとよみうひ一半を載うるのあつどゝふ源氏君のさうをを出
りてきうれるぶたひよ伊法をふいうて。ぶ上のうせまへるこまを拾原
主とあうる人のまづ一人うれまへうそやうて光源氏のやう原を拾へべき
下ゞ海へさて幻巻をいうりて。正月より十二月まで。かの巻巻ハ拾ひ

ゆていとくなどにたまつりをさきうう〜時〜の月花本末ふよて人て書
はくされる趣いともく〜めゝれし〜く〜学法欲さのあよ源氏君て
やゞてかゝき所よゞにやうふかれる。先年よりあをるる原紙にて大宗
をうようまゞろ〜爰ふゞふんこぬ事ふれゆく〜へゞひよといふ言をとこ
まつゝをやゞて先のろよおゝきるハ桐壺の事を結ぶ物のふ似ろ。よう〜や
光源ハあ〜ゞし〜とあきがくなり物にて源氏君れう〜所をかく
まゞに法様とせられるハゞひあくゞおゞゆるかの幻先の事ふ物ろのとす
ゞる月日とゝ〜ぬまふ年もヨゞ世もそふやつにぬるといふ言葉よ〜法
へるよ〜ひるに源氏君の辞世めにる言ふて〜やゞてきゞられまふゞにを
示〜〜るのゝゞさて世俗先年よそこゞくれ年月をうあおにて句文
先の結ふ先ろうゝきまひる〜後ろ〜と書出くその法すの事どもを
ついで〜まつる事ゞうひいそんうゞ形くんぬうくして法〜ふ〜うけても

出ひ及ばぬ事どもなりう〜すゞくせるあ〜ゆる仏物語ども。やまとも
漢ろをいそゞいゞまも〜先ひひとをてる人のうへをバかゞりもあに
第ろ成極めるる法ふして終〜ぬハなり。さまでもそふいうても。
法文ふ作るる法げゞくとにていとてゞふんゆるゞつよある法出物語
ハ既ふ爰まふ先ふての第〜のきハみを書をへてまゞ若菜先よりを
報恩(ムクイ)のゝどもをうに出ゝてよりてその終を法〜み省れるう〜〜。
いゞ〜〜と仏事事めにるゝと形〜突よる〜事れゞと形ゞ〜ひ志
らぬ味ひあり。まゞ書流ゝもいゝまゝるやうにこのかゝまゝるゝを出
出んよハゝゝもかゝこふも同ゞやゝ。ある歌されさ海を出あ〜ゞゞれゞ
事書〜ゞ。さて八同ゞもゞの言ゝていと日ゞゞ〜〜るゞ所をゞれをゞ省
きてなり〜ふ幻先一帖よ光君の出歌を法法ゝて〜るゞゞいゝもくめゞ
〜に文章の法といゝゞ〜。ゝん人をふるめて後味ゞゞにあのゞさて次ふハ

夢浮橋を書さして筆をとゞめられたるいひしらずめでたし。さるは先ッ
この宇治は先ッ八の宮に薫君と匂宮との傳へを匂宮にいひおきて。さて
椎本よりハ。八の宮の姫君たちの法事を書出られたるに。さまようされ
源氏君の事をかたりける世とハ。その世はいたく薄くなりて。いとちゐん
やかにあさはかなく。人情のさかりけるかぎりの事どもを。いとくきらに
法に化られたるゆめのにて。八宮の世にわびて宇治へ引籠りおひたゝて
北方うせ給ひ。姫君たちみなしごとなり給ふを。おふしたてつゝまつりにん
づからひとり起りく。佛の道に志ふかくおはしおとこひたなどをさせ給ふ
さ給。又薫君の椎本君の事をとほの後志ありて。身をおもひさとくおひ
なしおくまゝつひに佛のみちにんずしふかくなりて。椎本びにとて宇
治へ移られたるさま。又大姫君の中君をいそで世をあらせなんとて。
身をすてゝいはひきあつさはなど。いとくあはれふかくして。おもむに

源氏もちまさぬなりさてかくとかくにおもひなりたる佛ごゝろのさは。
つひに薫君大姫君にけさうし給ひしを。事よくのがれんとて中君に
あはせたりまつる殊物あらずおもひたまひて。匂宮をいざなひて中君にあハ
せそめまつる。大姫ぞかくなりたまひしかバ。又中君に思ひうつりあく。
とかく、さまかしくおぼえけるのそれ。中君のそれを遁れんとて浮舟君
をかくしつゝとすゝめたまふもちに匂宮よ事いでたし。すそれより薫君
の浮舟を宇治にすゑたまひつゝのよひまに殊。匂宮も心ありて。ひそかに忍ひ給ふ
あだにふびんハあらまして浮舟君の所をなだんとすゝめかども。いづれも
いづれも浮うかれあはれのうたかれてこれわざるひぬもあはれやうなる
ハかの源氏君の花やかにみだされたる。法會とハことに侘く体をとらへ
きたる物に今一さハめづらしたにあはれなりし。さて匂宮をとのこゝ源氏君
よりもあざくしくみだりしくかなかし。さてまつらげく物かたりの教を

源氏の性格を二つにわける

さうし書るめでたされたりとみえたる哉。さればこそ小浮舟君にいたりては。いともかしこきまでにみえたるハ。いともく上手の筆つきといふべし。大かた源氏君の御本上を。あれがちなること哉おかしとてむかしくせハ。さながら又いと人のなさけをもおもひもたり。其のあはれふかくして。花も実もある人にかなひたるなときこゆるハ此物語のむねとせる人なれバ。其ふかきを二つにわかてる法なり。故に薫君ハ源氏君の実もまさりて。其あはれにあたりし源氏君かくの小ひとり一旬ハ源氏君にもまさりてわく。小がたくしくおかしみあさまのなるやうよからぬこゝろなされたる事光といひ。薫といひ匂といふなまへにて。かくしてかのあるべからざるふみへのなかに。をとこといふてえみらんやうよかれハ。いともくめでたくにて。めでたしといはんにも余りあり。さて浮舟君の尼になりて小野にかくれすむ事哉。薫君のゆかりのひとく。常陸守が子の小君をはじめ小野へ住みし。頃へて小浮舟の尼ハもとのひとにもえ逢

おもへバ小君のむすめくかへりきたるにより。薫君のさぐりにおよびけるまでにて。すべて一部を出とぢめられたるハ。鬼神もえおよぶまじき筆づかひといふべし。かゝる所にて此物語ハよみたてたる後もさうしうきぐさのことわりおほく。又おもかへしくて見まじくもく。いまだびもあくこゝちぞおほくして。作情のきハまりおさまりハあれ。此語の妙といふものゝ。ちとおもひまつる人ハ。こま錢あらバくらぶべくおのづからえしらんなどハ。とかうなりても。文作のめでたしのいひしつべきにあらねども。似たることもく文章に筆を省く法ハ。いとむつかしきことにて。ひたく省くにハあらで。省くべからぬ所まで省くことゝなる哉。此物語の文ハ。詞を要しくとゝのひたるものにて。俗にいふ。ゆるみたる。手のとゞくやうなる体なきバ。打見たる目ハいとゞもくしくみゆるやうなる物から。文がくすくよみてにちりまさりて筆を省きまでたる所などハ。いとをかしくかけても。おもひよらぬすぢにて。やゝ思ひくと見浮橋

さの末はさ清らハいみじくいひ尽くしがたう人の文ふも、さえて見て
こと好くなんありける。そもさこそ神うわたぶくとつねるものの名を、
かくふるよりもきわて八のをうきぬもあれど、既よ藤末はその太
上天皇のゝふ光君の業をきハんたくて、わきてさくゆ原をもめ
るうへなるまバ、此君氏末ハさてみ〳〵紙なくその俊ハ宇治をうた
くいへく、かのはま末はるゝどもをいひつてるさてあるまバかくてもさふ
いへあ氏末なくして、其解説のうだうなることを、書とへていさんやうと
なく〳〵。さてこ文源氏物語とゝめづけまてるもむ小説ふいてまてるごとく、
此物語よりもてるるハみな愛でとやうの言をふくめてゝちめ〳〵れさう
とゝんてゝる紙なくいへバ源氏君の終をかさてる幻をよ対へて愛幻を
うけ合をて法をとゝまてる物とおわ〳〵かをてゝもんふくめで
出とゝ。すべて此物語をめづ〳〵氏ろ氏ざ毎の文ろる中よかいあでの人氏

おもひもうまぬ末ぬッあり。そこ二ッハすでふいつかゝ。そ伝出と愛源物
光氏末とのゝすべ今三ッハくゝのうへよ名をたけぞゝて。いと多るくゝ
のゝすをたをもれみぞまるかくかと氏とゝれると六條御息所の事を伏おうん
とゝ。既ふうるひのくるよゝ紙いひあゞう。物語ともいとゝぶゝて。おまゝの
出ゝゝとへくゝをとろぞゝ出さまてると、葵ぞう毎の出ゝとも末桜出ゝとの間
ふ事を者うまてる所とゝくゝこの名をつけゝれざるすると六條御息所のゝす
とハ上條ふかづくもいへまバ今まゝいとゝ真末桜出ゝの初いとくめづゝし。
そゝを先ッむづゝ氏光の末よりして玉鬘君よんをとけるくいとおか
るる中に蛍兵部卿宮ゝとゝふんぞゝ紙ゝてのひざゝうゝみもかの文
をばゝとゝとふ物めいたるまるよ氏なゝ末りてさて藤袴の出ゝふ玉
うづくの君内侍のうみよなりては月うハのあバ入内ゝまうん事をきて。
さくうゝことよりはみどものみてる中ふかの宮紙て宮ぞうのふハ出ゝ

ありしすをいひくどくどめさるをきゝ木枯殿の初ハいとゝ心ひろ事ぬ
さゝあるふりてげさう人の中よりはよろひ知てゝ人くるさゝあふんてる髪毛
大ねの既よ丸蔦君紙はさるすをうれ出るふ枯さそよゝをバとゝで
問ふきゝてめさんすもかゝゝ人よあまひくめゝさでゝといさめきこえ
ゝんどさゝもえつゝみあへはバとうれたちであるる事づゝひいとゝあやしく
くすゝくめづゝうに心ひの外ふくゝもでめハ行すともちまぬをやうく
よみめくゆくまふ此方ねあれて中ゝるるるど折おどろくまでふ奇し
く孫しさてあすあ母の間ども浅へくも きハやうに中よりをバいを
ぎゝて霜月ふなりぬといふことをあゝくあて書出るより下ふ大ね敬
ひるもいとかくろへくるさゝふりてなゝてこゝりおをする紙いとんだれ
なくかんの君ら心ハ枯がゝそりとちであてあゝ一出れるいともく
珍あるりのふぞけりるこゝ及覆のいみどれ法ふていとらうげす

おいゝうる女の事して虎おやうみをも走らゝおふ祢をも殺うれべれ
いさかひありといふゝ枯そそる泊するゝどもをんて知べゝ大うゝ
これゝぞこの抽徒れ中ふすゝゝまてめでゝれとそうなりうる孤ゝを昔
ようのおどもふ用あれ事をバ多くいをまつれどかやうのゝハさゝも
んをつゝまれぞゝてなふざりふ秀逸されるハいとゝあくくちを
きゝぞふなんきゝる今さゝいぞかくいひゝてんハゝまゝふゝいとをゝ
ゝまゝゝゝまゝど かくさゝろに法あるゝをゝさゝ枯んがあゝびあげてうけ
ぞうゝ俗れそゝまをかへうんざるふたなんなふ此外ふもゝれやゝれやと
枯ゝうれどゝまゝゝふ泊ゝまゝバさのくハとてうれとゝめつ大うゝハ准へくも
さゝるべゝ一巻よ一巻の法あり一段よ一段の法あるゝふゝもゝまゝゝごとよ
詠ゝゝまゝバゝうよハ畧きう

をうゝのうれをうける所の事

此物語のうちに、春夏秋冬をりをりのけしきをかけるところは、ことさらにえんにこまやかなる詞おほくして、いひしらずめでたきは、誰もよく知るところにて、いまさらしるす事は、これその類に頻に褒べき名文なりなどいひのゝしるさまなれど、然れども、このけしきをかける所は、おほかたにそのえんなる詞をのみむねとして、かゝれたるにはあらで、みな其時々の心あはれなる人々の心にあはせて、事がらの哀れを深くきこえさする也。帚木巻にも時月秋のあはれなるさまかける所に、何心なき空のけしきも、たゞ見る人から、えんにもすごくも見ゆるなりけり、とあるをもおもひあはせて知られたり。なほ此外にもこれかれあるを、玉の小櫛にも引出ていはれたるがあり、おりあはせ見るべし。されば此詞は一部によくわたりて、けしきをかける所の作りぬしの意なる故、時文にはいとちひさくして、ことにかく挿みてぞ見るべき事をきはしくしきぬ。此文の例なく、他にもさる類ひなかりし。今よりは、今世に芝居といふことする所にうつし、草木などを作りて、又其事に似つきたる所のさまなど、たくみに作りかまへおきて、さてそのわざするをのこども、さまざまのすがたにいでたちて物まねバこそ、事がらもまことゝ見えて、見る人の心をも動かすなれ。かの物語のさまにたとへなくして、されば見てる花の盛りに、怨霊をなやまし、風あらくふき雨ふりそぼつる堤の陰などに、きらぐくしく作りてきたる姫君などのこゝろあらんには、誰々かと打ちれづくべき。物語のけしきをかけるところのあるも、これにひとしく、みな其をりをりのさまに随ひて、いとじくうれしひかなしひのすぢにもなぞらふべきくさはひにかゝるなれバ、これをもてほめんのしるらんは、かの芝居にはくてなぐべるくさぐさの作り物を見てやめんとうたがふくいともしきをこなるしざなるべし。さるを近き世に物よむ人などの文章とてかく作れるは、此物語などのさるけしきをかける所などをとりたてゝ、かいなづけて、いさゝかも作りたるところのあるを、ことしくべちに

文章とぞいひなる。文それが学びのためにとて作るくだりどもをとらへあつめて。ことに書をなしたる書あどもありて。おほかたハさる物を見てぞ作りける
ならひある学びのためにハそれじきよろしくにハあらざれど。さまでその我
皇國(ミクニ)の文章ぞといひいそんハかの牛の毛の一すぢといはん程のかず
まで。何れらひもなれ来なり。おのれも早くそのやうなることをおもひをり
しかば。いろできるまなびのためにふるき文どもをあつめて。其法を示さ
むとおもひたちて。これやかれやとよみ試しかど。然物語をおきてその外ハ。
これてふの法にあひたるハすくなく。文章のなんとなるべきもののかぎりなし。かまへ
ておひたつ。しいて作りよ数するにちかくさなりて言ふべきをば。文章を
おもふ人ハ。さるべきに評ずるわざをむとどめて見るべきこと。さまで中より。
みどりのまへにおもひ。鶴(タヅ)の毛をそて鳧(カモ)の脚(アシ)をそへたらんが
ごとき。かのぞこなひもあらんまで。いはゆるかの書いてとなるべきこと

あるべからし。これてふもいとさしあたることにハあらねど。近きよりの注
釈どもに。其さまざまのおしへなくて。おどろかしわろくなりて。細流おなどに
かの桐壺巻に。夕月のをかしきほどにといひ。月ハ入りがたの空といひ。月も
入りぬといふくだりに。その首尾ならぬやうに注して。おどろかしおほかるべき
ことはりなるを。実(マコト)にいとよく見出たへるふしもあり。然その月に對へる。風の
脈(スヂ)をバおもひめぐらしたまへる類ひもあり。くちをしく覚ゆるなども多し。
かくこそ評ずるを見てく知るべし。さまでに文かくるふんにつきまへるにても。
細流ハ注おほよそかくのごとき知るべし。

頭書評釋凡例

一 さたぐくの抄どもの説を挙るハ舊注新注をいとゞみか□かく方多
圈の中ハ字書の目を一字づゝとるゝ余ハ今あゝふ注する説どもを
圓き圈の中ハ評釈などゝ記るつ評ハ本文のいみじ所くを批評
あゝハ釈ハ本文の通えぐるを釈ものゝかきこの注をも
評釈とゝなゞけつ

一 先達の説を用みる書目の標をこゝハ巻ぐ引合をそゝんゞ

奥	源氏奥入	宮内少輔藤原伊行朝臣作
追注	奥入追注加	京極中納言定家卿補注
水	水原抄	河内守源光行朝臣
紫	紫明抄	紫雲寺素寂法師
最	源中最秘抄	同作
河	河海抄	四辻左大臣善成公
花	花鳥餘情	一條禅閤兼良公
秘	源語秘訣	同作
和	和秘抄	同作
不	不審抄出	宗祇法師
祇注	帚木別注	同作
弄	哢花抄	牡丹花肖柏紀聞西三條実隆公説
葉	一葉抄	肖柏作
細	細流抄	西三條右大臣公條公
明	明星抄	西三條内大臣実澄公
孟	孟津抄	九條禅閤植通公
岷	岷江入楚	中院中納言通勝卿

[箋] 岷江入楚中一説　　西三條實澄公説通勝卿記聞
[巴] 紹巴抄　　里村紹巴
[万] 萬水一露　　能登永閑
[湖] 湖月抄　　北村季吟
[湖師] 湖月抄師説　　箕形如菴説
[抄] 湖月抄中一説　　季吟記聞　　巳上舊注
[拾] 源注拾遺　　契沖法師
[新] 源氏新釈　　岡部真潤
[玉] 玉小櫛　　本居宣長
[玉補] 玉小櫛補遺　　鈴木朗
[餘] 源注餘滴　　石川雅望
[雅集] 雅言集覧　　同作

[雅譯] 雅語譯解　　鈴木朗

巳上新注

此外ハさはぐくの注釈あるといへども、若よりもとと用ゐるものゝ、又今余(オレ)が見ざるかぎりハすべて巻だ、右のゆゑも、雅言集覧、雅語譯解、二つハ此抄後の注釈にて、殊ども、とハ〳〵此抄後の雅(ミヤビ)ごとを解(トキ)る抄ゆゑ、ばらふくさ〳〵つ、紫式部より引る書ハ、某書云(ソレノフミニ)、まゝ某名云(ナニガヒ)などゝ、おの〳〵その名をあゝて記し、又をゝく或抄とゝ引る抄々、本居先生の書入本(キ)といふ抄の中ゆゑ引まる注ゆゑ、誰人の抄とも知ざれ、ゆゑ抄ゆゑ引まゝ、ると、全く同書とゝ見るものゝ、さて右のおゝどもを引用ゐる中ゆゑ、舊注ハ大ゝ省きゝく、こゝ要とゝ思ふ、ことのゝ注釈、むゆゑ、新注をゝまゝり、その中ゆゑも、玉小櫛ハ抄ゆゑ多〳〵、要ゆゑハ上よいゝり、

舊注のうち、河海花宴などゝ既よいそまてゝることゝの弄花細流などゝ

さるがら見えつるを湖月抄などに後の方をむねと挙たることを、
玉の小櫛に難じて、さきの方をまづ挙べきことなりとあるよしいはれたるは、
まことにさることながら、後にいでたる抄どもは、さきの抄にもれたるを
事を見出しつるもあらたなるものなれば、今はあらたなるを先に
その後に旧きをつらねて、事のすぢの穏かに聞ゆることを引出たりと
より彼此同じ事なるは、さきの方をのみ挙つ。されどもさきの抄よりも今
少し出加へつる説なども、あるは文後の妻しきによりてあげられたる
やむことなきはいれぬもあらざるなり。

一 旧注釈ともに解きつるすぢは、ひとつに定めがたし。其解ど毎のいふ
ぞやむかしえて、ひがごとなるも多くぞあるは、同じ抄の中にもなほ
其注どもを改めて、おのが釈の下に記したる所多くあり。されどもと
あらたにいはで、ひとつ/\其説をばしるしたるに、事は心と快しからぬも多かれど、

とまれかくまれ本文の意の通えやすからんためにとて、くさぐさ一わたり考へ
得しまゝを見ゆるとほり、かしこきものゝ解釈を挙て、其難ぜし所のよ
ろしきよしを辨へいへり。

一 諸注にいひすてたる説の、いづれも同じさまなるは、詞みじかくして意の通え安
きを採とりつ。さるは頭書にものするに、そのたるは傍あらしめてく。

一 釈の長く/\しきにわたるにはゞかりしと、諸抄の説を加へいふべきことと
のある條とは、餘釈と号けて別にいへり。さもあれども本文の意に、ふかくかゝ
はれる所なるをも、いとも詳にわたる事をその説々を挙らつ。さて文
語の類例、抄本の根源、或は儀式調度の故実などをさして、本文の脈にあづか
らぬ事は、ふと解釈にもらしつ。

一 本文の傍にしるしたる俗言の譯語どもは、詳なるその語の義を注せば
語釈と号けて、べちに其語の本にのみ/\を注して、これらは皆まづ初めの

説をあげ次に余が案をもつて其足らざる所を補ふ。

一舊注新注をいそぎよろしく説あまねく事の也に入れ其要とする事を摘て附箋よりもつて其解もつること彼解釈ふのごとし。

一餘釈語釈ともにいとく解ぐる所の條どもハ諸抄の説を多く挙て後に余が考へを注す。但し諸抄の中に毎にらまてりとおぼゆるあればその説のこゝを記しいづれも解ざるの旨なるハさ記の説のこゝを記しいづれも解ざるの旨なるハさで余が釈のこゝを注す。

一文章を批評するこゝハ我皇国の書ハをさ〳〵なんぞ大なるこゝハ今始めてものすることなれば其はしりなるこゝ論ぜまほしきこゝ多し。其よりハ上條に既ひいでつ。其はしりのかゝれ名どもをこゝに挙て大概を注す。されハこゝ初学のこゝ論ぜんよりこなつ。さて此目どもハ多くこゝ入れをさるべくふとまるもあり。又此掲條の注に若よりいるを用ゐるもあり。

又今あゝふ余がつくれるもあまねく事のこゝ注れさやうやこゝ記を主として。はあのちふもつこゝの例格に拘ひ泥まず。人〳〵さるこゝろしていふ〳〵むべくぞ。

主客

人と人と相對ひく事ある時。こゝむかとあるこゝを主といひ。その主こゝる人の事あるこゝて對へる方を客といふ。こゝまつふよりて其所の文に内外の差あり。又其こゝ段ふつ記ても主客の法あり。准へくあるべし。

正副

軍を出すに大将軍と副将軍とあるごとく。その主とある方を正と。それに附属へる方を副とこゝれよつ記て文法に軽重あり。

正對

人ふまれ物事ふまれ同じ物の事を相對へく優劣なるを正對といふこれハぐふ對といひてもべくまど次の反對ふむへく四字を加へるのみ。

反對

これハ一事の反うへを相對ふをいふ半とへバ西ふると日てると夜と昼となどのごとし半同じくまどといへども表裏ふれ對ふ故ゆく反對といへり。

照對　照應

この二つハ同じ事なるまど照對ハ一事の相似るさまを再びあらそて前の事を相照し對へるをいふ半とへバ日と月と東西ふ光をあらそふごとし照應ハ前ふ出る事の末あへなく消失むて再び脉をいのもて前の趣ふ相應くをいふたとへバ日の光をうけく月も星も光をさあつがごとし。

間隔

一つの事を語るあて中くふ一たくふ事つゞけてハいと長く煩ちく なりて前ふ人の倦んこと浅からひたりて暫く切断さく其間ふ他事を挾こ隔るをいふ例へバ遠く海山を隔るふ所くや旁のへごとく て なりくふそくたをうくんあるごとし此法巻中ふ抜ふ多し。

伏案　伏線

前の二つ前くハ同じ事ふ伏案ハ事ふいふべたるをいひ據へく ひとくに其端をあらそふ伏線の線ハ糸すぢとよむ字ふく遠くいふすぢの端を伏垂くをりくを繼めを いくもて末ふ至るまく結び竟る時ふ糸ふぐちを引バ要さるぬひめ巻く動くこのめり。又結構といひる所あるも同じ類。

結構ハしらざまへのゆゑ。

抑揚

抑ハおさふること、揚ハあぐることにて、文の勢をなす法なり。たとへバ、柄碓の頭を揚んとして、ハその尾をよく踏抑ふるがごとく、事がらなどもよく揚ていはんとて、おつることを抑へおくをいふなり。

緩急

字のごとく緩きと急しきと、其事を叙ること、緩き時ハ静かにして、なだらかに春日のうらゝかなるに処女子の野辺をゆくがごとく、急しき時ハすさまじく、野分の風の梢をゆるがすがごとし。各そのところにしたがひて書わくべきなり。

反覆

事の急にうちかへりて、その勢にいたくまぎらはすを云。さるハ目がごと

しか反覆して見ん人よ、おもひのほかなること驚せんとめぐらせ。たとへバ、しづかにすみわたれる月影の、俄にかきくもりて、おびたゞしく鳴わたる夕立のあれにて、たちまちに降来らんがごとし。

省筆

事の長かるべきをいたく約めて、前後のさまによりてかゝざることを、見ん人におもひやらしむる勢なり。他にくわしくしるせることを、人の推はかりの中にゆだねて、或ハ煩ハしきをいとひて省かるゝなどの類をすべて省筆といふ。

餘波

大じき事を出して後に、そのなごりのいまだ消失んとするを惜みて、そのしなど出して引延る類をいふ。餘波ハいはゆるなごりにて、大波の打よせたる後に、程さゞら波しづまらぬ遠浅

小潮の逆りてやうゝふ引さるさまを譬へていふなり。

種子

これらの物語は間つゞきの時は、始一ツとり出く、始終の種子(ノサハヒ)とさるべく若紫の雀子、女三宮の かゝ猫の影ひなり。

報應

あるものハいそゆるものゝ報(ムクイ)の應ぜるといふ。此事の報ふ彼事をあらハして、ものゝ道理を均(ヒトシ)くさとす。

諷諭

今の現よあるものゝ諷(ヲシ)へく、一ツの事をあらハし出して、かの事ことをを諭(サト)すをいふ。この二ツハ作者の心ばへ中ふあるものゝ推量(オシハカ)りて云ふ。

文脉　語脉

文脉とハつゝ孫かりてゆく文章のすぢをいひ、語脉ハ語のかゝりゆく

すぢをいふ。此、そぢの續きて、事の さまを要(ツラヌ)き通さること。人身よ脉(ナスジ)ひかゝく、体中(ミノウチ)を要き通るぶごとく。又伏線の條理(スジ)を脉といひ、ふもあるべどそハ別事(コトゝ)なり。

首尾

事の始と終とこゝ。これハ首尾あひ ゝあひて結ぶ所をいふものなるべ。ニーくハ首尾相應(オウ)といふべハ、なるべ。ぬことなるまで。皆くいひなるべくハ首尾とのこいふ。これより下ハ舊注どもふいそれゝる名目(ナ)のまゝあり。

類例

其事其語の比例ふ。他(ダ)一書の語、まゝ奇あるを引出るを類例といひ、あゝ、こゝまハ注法の目(ナ)。

用意

こゝに八作者の言を用ゐゝるふるまひてさほよくとりなす
あつらふる技いひなゝひとり生とゝバ文脈の言のさほよくかゝて
ほけるゝ巧さ海を用ゐありあるといへる用言のごとし。

草子地

物語の中なる人のゝ詞あゝで他より評ずるごとき所を草子地と
いふ。こゝに八物語ゝる人の語ずとりあゝる作者の語ゝその中ふ
草子地あづらおびゝく文物語の中なる人の公ふなりていふ所行り。
まゝ物語の中なる人ゝ詞あづら。実八草子地よりいふ所あり。言ひ
とゝつゞ。

餘光　餘情

餘光八ふかひと訓むきふて。文外ふ余あひて。いひもゝぬ味ひある義
賞ていふ餘情八生半言ゝるふ程ゝだうあれあれの含まりて

少ゆるをいふ。このふゝろハ共の小形ある程半ゝまで。言外ふ余ひ餘り
るいみゝじゝ後評ぜんゝあよとり知るるのゝゝ。

此外ふもあ〻あれど。今八生夫むひまのゝ言つ他八准へてるさとるべし。

本文譯注凡例

一　此物語の本ゝ八ふ小柳ゝ云ゝ中ハむゝ一河内本といふと。また表紙といふと。
大ゝゝ二やゝゝ。ゝとゝ。ゝ中小宮家中納言の本ゝあるをもゝ。ちゝ程ゝ物ふ
べくよ程ゝ。きをいゝゝびゝゝぶるふまゝ表紙のゝ紙ゝゝれるさゝな
ゝハいゝゝゝでやいづまれゝ中ふれよ程あ程ふつきてゝとゝもすゝもすべき
ゝゝぞ好きがあゝゝゝでそのぬゝよよりてさゞむべきふハあゝゝざるをやゝと
いゝまゝてゝる。まゝとふさゝゝとゝがゝてゝまゝ表紙のゝゝふゝゝおゝるゝゝつけゝ。河
内本ハおのづゝゝ世ゝよりてゝやゝゝゝなゝゝゝゝるゝゝ。ゝまゝゝおゝ世ゝゝゝゝ

異(カハ)なる本も、今の世には見えず。但し紹巴抄といふ物には、また表紙中比河海の
やうありしといへるもいかがあらむ。中比はむかしと河内本を用ゐしにや。され
ばかしくは今の世に傳はれる抄の中には河内本といへるもあるにや。それとも何(イカ)さま
かくもあまたさしたる異本とてはあらざめり。我らどもすなはちての筆者。
ことみによりて引る所あまたれば、今此の本文は、互に校(カムカ)へ合せて、そのよろしき
方にしたがひて定めつ。其本どもは萬水一露、湖月抄の本をはじめて、事(コト)に
ふとありて板本(スリマキ)五部ばかり、古き写本(ウツシニキ)二三部を校(カムガ)へ合せつるに、玉に
榜に校正されたると、諸本に多かく引出たると、又あひまじへて用ゐつ。
なかにひがくあやまりとめるをば、よる本どももあるべけれど、おのが見ぬをば
いかでさん。後の人なほよく校(カムガ)へ正すべし。

一 校(カ)へ合せたる本文は、余(オレ)がよしと思へる方にのみ従ひて、あるはしつれど、彼此
ことなりのまがはぬ所は異本のことをも右傍(カタヘ)に注して、イ云とあらはしつ。

さまでおぼしく誤れりと見えたるは、しるしづけもしてさらに注せり。
はてまさりとる。誤れる数はいと多くあれば、そこにかかる事をとどめ
ゆりくまろ方はかへりて、文侍(ハベリタウ)るなどの、かなふなどの辞は古き写本
どもには大かた省かる所と見えて、までここにまよひて、竟(ツヒ)にはてにをはの
格をさへ誤りて、そのきこえぬ事も出来しさまあれば、今は悉く加へて
うれふかたれは古へざまにはかなへれど、さる誤りもよりはまされるにぞ。

一 本文に脱(オチ)たる語ありと見えて、そのあなた、義(コヽロ)の貫(ツラヌ)かれぬ所には、かりに□
かくのごとき標(シルシ)をいはして、釈にそのよしをことわりつ。又衍(アマリ)やして加へたらむ
と見ゆるも、ちかきはかく□かくのごとき標(シルシ)を圏(カコ)みて、さらかふに其字を
省き、又さらでなくては、えあるまじき語の脱(オチ)たりと見ゆる所には試に其(ノ)語を
補ひて、○かくのごとき圏(カコミ)の中に記しつ。これらは皆やむことをえぬなるわざぞ。

一 假字(カナ)は大かた古(へ)に随(カ)ひて、あらためつ。其中に梅をむめ、馬をむま、

諾をむべおどいうへうといひしなど語をむといふ類ハ此抱朴子まこ
る比も既よりかくのとおぼえて和名抄其他のものゆもむとある
ること多し此抱朴ハ既ふ訛(ヨコナ)て頼(クヅ)まるる音便の詞又字音(モジゴエ)の語あどとも
さまざまふかまてる例おまバこまてもなるむめむまとやくふむと
かくべきてとうあまでさてハ初学の学れんてまどふべしくさいひ
ともなるんうとく特うとかける類(ヒモ)こまるまたりこれらハ作者(ツクリヌシ)より
云よさんまぐふ本とハおりんまで此書ハ初学のくあふとて本文をざよ
譯(ウツ)して注をるびどのてくあまバこまてくやむりを抜ぬもるざこまて
語の清濁(スミニゴリ)も大ること古ふ随ひく点をくひへてり さまでもまふ知(ラ)ま
ぐてしハ多くハ清(スミコエ)るのまふしてさしおきて。

一

尓有米里(ニアルメリ)をなんあり何止(ナニト)をなんど有辨伎(アルベキ)をあんべいなどいふ類ハみか
音便ふくづまくる語ふまで此抱ハその世れ俗語のまふかれる俗

なまバ初ようかくふてさまバ今ること聊(カ)も改めびさて言ぶ所ハ
あえう あど あべいとまるをんを加へくよみあひうこれハ世の
詞つしを失ぢとそのまぎとんまバ片假字のンを加へくそのよこぎ
をかつぐまつされど後ふまりてハどづくてくて皆さびしるう
いづまもンを加へるんよのむべ此類あハ字(ラ)注へてまるべ さてまこ
うれしくうおしくあどのくをうれしくうあしくあどうとまること
も音便の詞まるを諸本くぐひまくいづまあもまるつ
調のよくしたよまくぐひまくいづまあもまるつ
一
本文の左旁ふ譯語(ウツシコトバ)をりのまることハいとく俗(サト)びるまるぎふて識者(モノシリビト)のお
もうんこともがやうくまで此抱をとむんごとふ雅(ミヤビコト)云の耳をて
事の云ふ舟へぐくといまよりく学るを講ぜるまりあどふいさまふ
云語の云ふ本文の旁ふ記しつけるをんてがくてハいと者よりの と

いと人のおかうるゆゑふに平のまゝふ彫をつゝるまゝバかとより識者ふん
きべたりのふハいつぶ〻でいとうひ半よびの業さてハ女童おゞのふとんく
やゞて鮮ようべたくさハひふもとそのゞりくさハあるまゝで千年ふちうに
雅語と今世の俗語ふ譯しとうく決く平のようふへんとハ先生もいへ。
ゞくなるくふ容易くぬるぎあるさバ先てあて先達の説されるを旨よ
りとづたて余ら考をもくハへくまゝで特その言葉吳ゑくとなくくく。
全く相當らぬすゞりあり故お事くぬ事よハ雅言一法よ俗言を二
語づゝおゞて考まゝり平俗のさを互ようまゞへてさかるべしとさても
相違しゞた平ハゞゞふ某くノゝゞやくふ泊をり。さて又漢字をと
交へて泊しるハいと逆ゑることとうあまゝで今世ハおゞくこの漢字れ
こうりくよりゞを通ぜるゝ多くまゝで大くこよ知るべしたゞりハ
約やうあり成きんとくく。かゞゞ注しつけるゞこまハくあべて俗ふ彫ひ

なまてゝるゆゞ書く法をまゞバ平字の本義ふハ半ゞゞる事くなた
みしとけくゆゞ正しく相當る字して泊する時ハ却て初学のさと
ゆゞくたまも多くまゞバこまもやひりをたゞてあんされど作りふ
くゞくることゞりたいまくくんまひして記しつゞまく平文の右旁ふ注し
くるハいづまも平字の音なりとゆるべし。

一此物語を講説きんとするふハ雅言と俗言とあひくのゝべたやくを初
ようくくく見ハ定めてあをゞまゞバ釈く人の言と聽く人のさてい
くく半ゞゞみとあくくうまくその文のさを伝へ受ることとけゞゞ此ハ
なの半年ごろ試てさかまるるゞくゞ事の為よハ必俗し何ども
いまくうやくあくくもけるべたやくまハつゞでふいあくく。

一此物語の文章ハくゞくけくくゞくくく

けぢめなくて、ふとんくハ一つだにある事のやうにあり、まことその文法もうゝうへよおろへして、倍勢をあやまることなく、なかざりかんくハこのやうにあることもあり、又かゝれぬふいへべだに事をいつもゝ後へまわして、中事とやあるさ法かれる所わかりく甚しき所ハ紙一ぱいを過ても、性行のすともさうぐだに事どもわかゝしこまつあぐゝ拙ごもとハこよりあくもそぐまさる所みく、文章の法とするにまつ、結まこども、初学の学ばこうずるこゝあまでば今假ふその標をけちやく、中ありがだを示さんとなれたゝ漢文の例よあゝひさる事をうまでとやく新釈よ拙をゝれさるかたゝぐひく事をまゝくゝへつ、中例どもこゝふ巻るぐごゝ。

』大段落の標

一事を全く倍を竟さる界ふ此標をあのしつ。

一小段落の標

一事ハもぐゝく竟さる所の界あぐふ此標をあのしつ。されども皇國言のふみハ漢文のごとくきハやうよ分かさることなだ所もあまべられぐ大ゝられ標とんだべゝ。次あるも同じ。

◎彼と此と事を分つ標

彼と此と自と他と事のかゝる所、又問答のまぐゝ〻ゝさ所、まこ此事をもぐゝくさゝあだく彼事を挿さる所あどの界ふかる

點を加へく標とす。

◎◎◎◎眼目の語ハ標

こゝさハ漢文小字眼あどいへるふひとく其所よもゆとある語、或ハはゆふ多くつひく、そだをあやあゝる語、まこハ伏線の脉を綻ぐゝる語ふどの右旁よかる點を用ゆく標とす。委ゝくハ

所〻の釈ふさるあをバことゝるべし。

○〻語の清濁ハ標

濁るゝことハ點ハ常のごとし。必清てよむべき詞を俗ふ濁ることあれ語ふハ。點をかゞゝして。ゝ清べきよゝを示しつ。

・・助辭發語の標

助辞(ヤスメコトバ)發語(オコレコトバ)のまゝ〻ハ〻きゝハ左旁ふかゝる點をもゝて。

‖‖互ふ乎波ハ首尾の標

こゝハいそゝゆるてふをはの係(カヽリ)と結(ムスビ)との標〻。結びゝる所の詞ゝ。ハかやうの點を右旁ふもゝて。これよ依て語脈(コトスヂ)をんぬゝむべし。こゝハいと要あゝとゝ。

語脈轉倒の標

語の脈(スヂ)を上下ふ轉倒(ウチカヘ)して。文勢(ヒ)をなゝゝる所のまゝ〻ゝもゝきふハ。かゝのごとき點を右旁ふ引て其語の脈を示て。この點ハきれゝる所を継(ツギ)てんぬべし。ゝゝとんバ。桐壺のもゝ。毎ふの方あんいゝとんのゝ人ゝよりハるふて。㊀おやうちゞ〻。さゝあゝりて世のおゝ〻ゝふやゝ多ゝるゝ。ゝゝ〻ふもおゝとゝ〻ゝ。伊平のぎ〻ゝ。ゝをも。㊁ゝてあゝまひゝゝゝ。ゝゝ〻ゝとあゝるゝあゝどハいゝとんのゝ人ゝよりあゝるふて。伊ふの儀式をもゝて。ゝゝ〻ゝゝゝ。ゝゝ〻ゝゝゝ。ゝゝ〻ゝゝゝ

所よハ――かく二筋の點を引そへて、そのすぢを詳ふに、些ハ抜ふ
ゑをはけくんとうつべし。大ク此抜後のゆえんを所〻に。
此法をもつぢして、よのつゆ抜書をよのむごとく、ぐふおつぐけて
よまんとするうふ、半のさ抜弁へぐ記ぞり。さまこバ抜ふよく
ゑ得おつべきこと。

㊀㊁㊂㊃ 隔句文脉の標

こゝにハいそゆる隔句法の遠く係まる所まて上より受くる文脉を
もつ〻めんうふ係まて斷くる下ふ㊀をもつ。受て継くる所ふ㊁
をもつ〻この點を引合せく、其文の係まる所を解べし。二重ふ
も三重ふも句を畳くる所よハ、㊂㊃㊄㊅などく記して、脉をかつ。

△ ∪ 語意を補ふ標

いひ切くる語の末ふ含めの〻くる所、又今世の語ふてハ必所を加へて
きく〻べ記所おどふ、所を左旁ふ注もくる。他の諸抜と紛まで
ぐ〻ふに、かく〻る點の中ふもつ〻この中ふある抜ふ意を挿ミ補ひ
て、そこの文を解べし。いと長記所を抜合ものくる、別ふ改書の
釈ふ所をいつ。

右の外ふも、聊づの注例あまでそこを准へてもさゆるべし。舊印本ふど
ふ〻の心詞抜所よハ、某心某詞ともつ。草子地よハ、地ともる抜數ハ、づ
まも改めぞ、引ふの所よ〻くる点をかつるも、湖月抄の例ふあらへる
すども、上條よいつるぐごゆ〻。

校正譯注源氏物語評釋首卷終

〇八十二終